

『源氏物語』における漢文訓読語と翻読語

——「いよいよ」「悲しぶ」「愁ふ」「推し量る」——

藤 井 俊 博

一 はじめに

「いよいよ」「悲しぶ」「愁ふ」の3語は、漢文訓読文に例が多い一方、平安和文の中では用例が限定される傾向がある。ところが、これらは『源氏物語』において多く用いられることから、和文体の用語と見做される場合がある。『源氏物語』が漢文に基づく表現を多く導入していることを考えると、これらは訓読的語彙の導入という観点から再検討する必要がある。また、漢文訓読文に例の多い「悲しぶ」「愁ふ」は、『白氏文集』などの漢語の影響を受けた翻読語の観点からも検討すべき語である。

筆者は藤井(二〇一九)で、『源氏物語』に連文の漢語による同義的結合の複合動詞(翻読語)が多く用いられていることを指摘した。その際、例数の少ない翻読語を『源氏物語』独自の用法として

いくつか検討したが、「推し量る」など他作品にも見える高頻度の翻読語については考察を留保した。これら高頻度の翻読語も、『源氏物語』の文体的特徴の面から捉えるべきものである。

そこで本稿では、『源氏物語』に例の多い右の4語を取り上げ、漢文訓読語や翻読語の観点から文体的特徴を検討することにする。なお、『源氏物語』の例数および本文は、基本的に新編日本古典文学全集本による「中納言」(日本語歴史コーパス CHJ)を用い、その他、各種索引類を用いて用例数等を示す。^①

二 『源氏物語』に頻用される漢文訓読語「いよいよ」

副詞「いよいよ」は、『源氏物語』では極めて多くの例が見られる一方、他の和文作品での使用例は概して多いとは言えない。

宇津保物語15例、源氏物語104例、浜松中納言物語15例、夜の寝

覚9例、栄華物語9例、紫式部日記3例、大鏡3例、蜻蛉日記2例、狭衣物語2例、伊勢物語1例、落窪物語1例、枕草子1例、更級日記1例、讃岐典侍日記1例（竹取物語・土佐日記・大和物語・平中物語・和泉式部日記・堤中納言物語に例なし）平安初期の物語類や日記には例が少なく、『源氏物語』以降、その影響を受けた『浜松中納言物語』『夜の寢覚』『栄華物語』に例が多くなり、その他、紫式部自身の『紫式部日記』や漢文訓読語を含む『大鏡』などが目に付く。このような偏りは配慮すべきであるが、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』では、

A 源氏物語に見えないもの

B 源氏物語にも見えるが、用法や用例がさがられてゐるもの

C 源氏物語にも見えるもの

にわけ、AとBを以て漢文訓読特有語とした。Cに属する「いよいよ」は和文語とされ、漢文訓読体と和文体との二形対立を「マスマス〜いとど・いよいよ」で把握している。しかし、『源氏物語』に例が多いことをもって「いよいよ」を和文語とし「ますます」と対立させることには疑問が残る。漢文訓読文では、『訓点語彙集成』に「イヨイヨ」は162例が見え、漢文訓読語として特徴的だからである（「弥」50例「逾」46「転」42例等）。そこで、『源氏物語』に「いよいよ」が集中することは、この語が和文語であったためでは

なく漢文訓読語を排除しない『源氏物語』の文体上の性格によるのではないかという観点から検討する必要がある。次に、「いよいよ」「いとど」「ますます」の文体的な位相を中心に見ていく。

『源氏物語』の「いとど」「いよいよ」は、いずれも「あはれなり」「心苦し」「恥づかし」「悲し」などのような心理表現に係り、その度が増す意味を表す用法が多く見られる。

○いといたう思ひわびたるをいとどあはれと御覧じて、
(桐壺)

○さればよと思しあはせて、いよいよあはれまさりぬ。
(夕顔)

○『参りては、いとど心苦しう、心肝も尽くるやうになん』と典侍の奏したまひしを、
(桐壺)

○え忍びたまはぬ御気色を、いよいよ心苦しう、なほ思しとまるべ

きさまにぞ聞こえたまふめる。
(賢木)

○心のみおかれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし
(紅葉賀)

○ささめき聞こゆれば、いよいよ恥づかしと思して、
(明石)

○冬になりゆくまゝに、いとどかきつかむ方なく悲しげながめ過ごしたまふ。
(蓬生)

○大臣も、かく重き御おほえを見たまふにつけても、いよいよ悲しうあたらしと思しまどふ。
(柏木)

これら心理表現の例に加え、情景描写でも共通する語に係る例がある。両語に明確な区別は指摘しがたく同義的と言えよう。

○まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、
老人ども笑みさかえて見たてまつる。
(末摘花)

○あまた宮たちのかくおとなびととのひたまへど、大宮は、いよいよ若くをかしきはひなんまさりたまひける。
(総角)

『源氏物語』で両語に明確な意味の相違は認めがたいとすれば、もともとの文体位相の相違に求められるのではなからうか。

上代の『万葉集』では、小林(一九六七)が漢文訓読語を用いたとする大伴旅人の和歌に「いよよますます」が見られる。山部赤人の用いた「いよよますます」とともに例を挙げておく。

○世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり
(『万葉集』七九三・大伴旅人)

○清き河内そ春へには花咲きををり秋へには霧立ち渡るその山のいよよますますにこの川の絶ゆることなくもしきの大宮人は常に通はむ
(『万葉集』七五九・山部赤人)

「いよよ」は客観表現「絶ゆることなく」に用いているが、「いよよ」は心理表現「悲し」に用いる点、『源氏物語』と同様である。

「いよよ」は「いよよ」の母音連続を避けた語形である。「いよよ」は「弥弥」(次第に増す意)、『漢書』『後漢書』等をヒントにした翻読語と思われ、「弥」「転」「逾」等の訓読に多く用いられた。「いよよ」も漢文訓読語として平安中期頃まで例がある(『天理

本金剛般若経験記平安初期点(八五〇)』「逾イヨ、」『立本寺本法華経寛治明詮移点(一〇八七)』「転イヨ、」。

一方、平安時代の和歌では、一般に「いとど」を用いた。

古今2例、後撰11例、拾遺8例、後拾遺8例、金葉3例、
詞花1例、千載8例、新古今21例

和歌の用語は、和文体の物語の基調語ともなる。「いよよ」が比較的多い『宇津保物語』『源氏物語』でも、「いとど」は各々46例・337例もの例が見られることがそれを裏付ける。『源氏物語』では次例のように作中歌でも「いとど」15例が見られる。

○羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき
(幻)

和歌では「いよよ」の使用は例外的で、八代集では『古今和歌集』『詞花和歌集』に次の各1例が見られるのみである。

○おひぬればさらぬ別もありといへばいよよ見まほしき君哉
(『古今和歌集』九〇〇 伊豆内親王)

○あふ事はまばらにあめるいよすだれいよよ我をわびさする哉
(『詞花和歌集』二四四 惠慶)

「ますます」も、『後拾遺和歌集』に1例あるのみである。
○くもりなき鏡の光ますますもてらさん影にかくれざらめや
(『後拾遺和歌集』四四三 能信)

以上のごとく、「いとど」が和歌に多いのに対し、「いよいよ」は漢文訓読文で例が多い。古い例では石山寺本『大智度論』天安二年点（八五八）（大坪二〇一七が指摘）や、『漢書楊雄伝』天曆二年点（九四八）の例があり、漢文訓読文の常用語になっている。このような偏りを勘案すると、平安初期の『古今和歌集』『伊勢物語』『宇津保物語』『源氏物語』の「いよいよ」は和歌和文の用語でなく、漢文訓読調の文章語を取り入れた結果と思われる。

この点は、訓読調の強い中世の和漢混淆文を中心に「いよいよ」が定着していることと符合する。院政期の『今昔物語集』には342例もの例がある。「ますます」「いとど」とともに三部の例数を示すと（表1）のようであり、「いよいよ」は本朝仏法部を中心に広く分布していることがわかる。船城（二〇一一）は、「いよいよ」は当時の新しい文章様式の用語であったと解釈している。すなわち、漢文訓読文で頻用される「いよいよ」は和漢混淆文の一般的用語となり定着していると言える。その一方で、和文臭の強い「いとど」、漢文訓読臭の強い「ますます」は用例数が極めて少ないのである。（表2）に院政鎌倉時代の説話集や軍記物語の例を示しておいたが、漢文訓読調の強い仏教説話集などでは概ね「いよいよ」を多く用いるが、訓読的な性格が強い「ますます」の例は概して少ない。一方、『撰集抄』など和文調の強い作品では「いとど」が多く用い

（表1）『今昔物語集』の例数

		いよいよ	ますます	いとど
天竺・震旦部	88	1	0	0
本朝仏法部	179	0	0	0
本朝世俗部	75	0	0	1

（表2）中世の説話集・軍記物語の例数

		いよいよ	ますます	いとど
打聞集	3	0	0	0
華法百座	12	0	0	0
金沢文庫	6	2	0	0
三宝絵	24	3	0	0
宇治拾遺	20	0	19	0
発心集	5	1	15	0
撰集抄	14	6	34	0
十訓抄	8	1	9	0
古今著聞	43	3	7	0
沙石集	35	0	1	0
保元物語	11	0	5	0
平治物語	3	0	4	0
延慶平家	90	6	83	0
覚一平家	27	1	24	0

られる場合があり、「いよいよ」と「いとど」が漢文訓読体と和文体の指標語になっていることが窺えるであろう。

なお、『打聞集』の「いよいよ」は、いずれも通常「ますます」と読まれる「増」「倍」字に付訓したものである。『観智院本類聚名義抄』に「倍」「愈」の両字に「マスマス」「イヨイヨ」の訓が見えることも踏まえると、『打聞集』の「いよいよ」は「ますます」と同義の漢文訓読語と意識されていたことが窺えよう。

和漢混淆文に多く用いられる漢文訓読語は、訓読臭が弱く、和文

体にも馴染みやすい。『源氏物語』においても、和歌・和文的表現としての「いとど」を基調にしながら、和文体にもなじみやすい漢文訓読調の「いよいよ」を導入したのではなからうか。

三 漢文訓読語「悲しぶ」の和文・和漢混淆文での

活用

「いよいよ」と同じく、漢文訓読文に頻出しながら『源氏物語』で例の多い語として「悲しぶ」が挙げられる。「悲しぶ」は、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』では、B「源氏物語にも見えるが用法や用例が限られているもの」とされ漢文訓読語として扱われている。単独動詞の「悲しぶ」は3例だけだが、ここでは、名詞形「悲しび」12例や、「恋ひ悲しぶ」2例「悲しび思ふ（悲しび思す）」3例の複合動詞など、応用的な用法が多い点に注目したい。

○「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この御事になむ、もしはべる世ならましかば、

……

動詞（須磨）

○さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しびきこゆる。

複合動詞（柏木）

○母なる人なんいみじく恋ひ悲しぶなるを、かくなん聞き出でたる

と告げ知らせまほしくはべれど

複合動詞（夢浮橋）

○御土器まありて、「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。

名詞（須磨）

○願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、また、これを悲しび思すこと限りなし。

複合動詞（桐壺）

意味の面から言うと、これらの例は単純に悲しいと言っただけではなく「慕う・恋う」の含意があると思われる。第一例の「悲しぶ」は「過ぎはべりにし人」を慕う・恋う意味を含んでおり、第二例第三例の複合動詞「恋ひ悲しぶ」と意味が重なる点がある。

「恋ひ悲しぶ」はどのような漢語の翻読語であるかは未詳とせざるを得ないが、漢語「悲恋」（『魏書』『隋書』等）や「哀慕」（『白氏文集』卷五十七「與南詔清平館書」等）などが候補に考えられる。あるいは第一例のような意味を明確化するために翻読語的な語形として作った造語であるかも知れない。

第四例の名詞「酔ひの悲しび」は『白氏文集』卷十七・律詩「十年三月三十日……」にある「酔悲灑涙春盃裏」の引用である。

第五例の「悲しび思す」は「悲しび」だけで意味が通じるところを「哀思（悲思）」（『史記』『漢書』『後漢書』等）、あるいは「悲思」（『史記』『漢書』『後漢書』、魏文帝「雜詩」等）などの漢語からの類推で「思す」を付けた翻読語ではなからうか。

なお「悲しび思ふ」のように、「思ふ(思す)」を構成要素にとる例は『源氏物語』に多く見られ、次のように「思ひ+心理動詞」「心理動詞+思ふ」の場合がある。これらは「心理動作」を重ねている点で、連文による翻読語の構成に近い面がある。

(思ひ+心理動作)

「思し崇む」「思ひ飽く」「思し(ひ)侮る」「思し(ひ)焦らる」「思しひ浮かる」「思し(ひ)疑ふ」「思ひ恨む」「思し鬱鬱ず」「思ひ倦うず」「思ひおこる」「思し怖おづ」「思しおこる」「思しおほる」「思し(ひ)驚く」「思し(ひ)くづほる」「思し(ひ)屈す」「思ひ困ず」「思し焦がる」「思し志す」「思し好む」「思しことわる」「思し(ひ)懲る」「思し忍ぶ」「思し(ひ)知る」「思し(ひ)しをる」「思したばかり」「思し慰む」「思し(ひ)歎く」「思し(ひ)悩む」「思し願ふ」「思し念ず」「思し(ひ)憚る」「思し僻む」「思ひ惚く」「思し(ひ)惚る」「思し迷ふ」「思し喜ぶ」「思し(ひ)忘る」「思ひわぶ」

(心理動作+思ふ)

「焦れ思ふ」「推し量り思ふ」「怖ち思ふ」「おとしめ思ふ」「驚き思ふ」「悲しび思す(ふ)」「悔い思す(ふ)」「歎き思す(ふ)」「願ひ思す(ふ)」「喜び思ふ」「惜しみ思しめす」

『白氏文集』でも「思」を心理動作に結びつけた漢語が見える。

「思謀」「思苦」「思量」「思憶」「怨思」「疑思」「凝思」
 思い苦しむ場面を描く『源氏物語』に関わりが深い語ばかりであり、『源氏物語』では「怨思」「疑思」に対応する「思ひ恨む」「思ひ疑ふ」もある。心理を描く複合動詞について竹内(一九八六)は、「思ひ」に「心のうちにじっと抑えながら抱く」意があると解しているが、この背景には『白氏文集』の影響が想定される。

「悲しぶ」の使用が漢語・漢文に関わるとすれば、漢文訓読文に例が多いはずである。築島裕『訓点語彙集成』で見ると、「カナシブ」「カナシビ」は各167例、25例と多くの例が掲出されている(なお、「カナシム」25例、「カナシミ」4例)。一方、和文作品では用例は極めて少なく、「悲しぶ」は平安和文では、漢文訓読の影響がある『宇津保物語』5例の他、『紫式部日記』1例(浜松中納言物語) 2例『大鏡』2例『今鏡』2例(「悲しぶ」「悲しむ」各1例)がある程度で、その他では、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『落窪物語』『堤中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『更級日記』『夜の寝覚(但し名詞「悲しび」1例あり)』『狭衣物語』『栄華物語』『水鏡』『増鏡』には例が見られない。

ただし、『源氏物語』に見られた「恋ひ悲しぶ」などの複合動詞は、「悲しぶ」を用いる他作品にも比較的多く見られる。右の中で例数の多い『宇津保物語』では、「恋ひ悲しぶ」2例「恋ひ悲しむ」

2例、「泣き悲しむ」1例と、複合動詞の例数が多い。『狭衣物語』では単独動詞の例はないが、「恋ひ悲しむ」1例「惜しみ悲しむ」1例の複合動詞の例がある。『浜松中納言物語』では単独動詞2例だが、「驚き悲しむ」1例「思し悲しむ」1例「悲しみ思す」1例「泣き悲しむ」1例「歎き悲しむ」2例「惜しみ悲しむ」3例などの複合動詞の例が多い。『栄華物語』も単独動詞の例はないが、「惜しみ悲しむ」1例が見える。このように、漢文訓読語が和文作品に導入される際には、単独動詞より複合動詞（翻読語）として用いられやすいことが注意される。

右の中でも、「泣き悲しむ」「歎き悲しむ」は漢文訓読調を含む『水鏡』にも例が比較的多く見られ（「泣き悲しむ」6例「泣き悲しむ」1例「歎き悲しむ」1例）、『今昔物語集』になると後述のように数多くの例が見られるようになる。漢語「悲泣」「悲歎」を転倒して生じた翻読語と思われる「泣き悲しむ」「歎き悲しむ」はやがて和漢混濁文の特徴語として定着するが、平安後期の和文作品にすでにその先蹤が見られるのである。

院政鎌倉期の和漢混濁文になると「悲しむ」の形が多くなる。院政期の『今昔物語集』では「悲しむ」「悲しむ」の両形が存している。（表3）に部毎の例数をまとめたが、巻二〇以前の漢文訓読調の強い巻を中心に全体に分布しており、特に「悲しむ」が和漢混濁

（表3）『今昔物語集』の例数

		天竺・震旦部	本朝仏法部	本朝世俗部
悲しむ	22	51	11	
悲しむ	160	180	30	
悲しむ	4	0	0	

文の用語として定着し一般化していることが窺える。

また、『今昔物語集』では単独動詞に加えて、次のような複合動詞の例が多いことが特徴である。「悲しむ」「悲しむ」を前項にとる例は次のようである。

「悲び愛す」5例、「悲び哀ぶ」2例、「悲び合ふ」2例、「悲び云ふ」1例、「悲び懼る」1例、「悲び傳く」1例、「悲び悔ゆ」1例、「悲び困ぶ」1例、「悲び助く」1例、「悲び貴ぶ」32例、「悲び貴む」5例、「悲び泣く」5例、「悲び歎く」5例、「悲しみ歎く」3例「悲び迷ふ」2例、「悲び養ふ」2例、「悲び喜ぶ」4例

これらは、連文の翻読語による同義的結合であるため、次のように転倒形が多いが、「悲しむ」の形では特に「泣き悲しむ」「歎き悲しむ」の例が多く、和漢混濁文の特徴語となっている。

「哀び悲ぶ」2例、「哀び悲む」2例、「悔い悲む」1例、「貴び悲ぶ」11例、「貴み悲む」1例、「泣き悲む」143例、「歎き悲ぶ」

12例、「歎き悲む」100例、「喜び悲ぶ」3例、「喜び悲む」11例
『今昔物語集』では、『浜松中納言物語』『水鏡』にも見られた
「泣き悲しむ」「歎き悲しむ」を筆頭に、同義的結合の複合動詞の形
で多く用いている。ただし、『今昔物語集』の「悲しむ」「悲しぶ」
は「愛す」「哀ぶ」「助く」「貴ぶ」「喜ぶ」「養ふ」など仏教的感
動・仏教的慈悲を表す動詞との結合が中心であり、『源氏物語』の
人を恋う意味とは必ずしも重なるわけではない（これらの「悲し
ぶ」の意味用法については、藤井二〇一六を参照）。

中世では「悲しぶ」の例はさらに後退し、『延慶本平家物語』で
は「悲しぶ」2例「悲しむ」37例である。「悲しむ」の形は、『宇治
拾遺物語』7例、『覚一本平家物語』46例など、物語用語として定
着していく。このような流れの中で、『宇津保物語』や『源氏物語』
の用いた「悲しぶ」は、漢文訓読語を物語の文章に用いたい早い
例として注目される。「かなしぶ」をはじめ、築島がBとして挙げ
た77語の動詞は、『源氏物語』が取り入れた漢文訓読語として、文
体史の面から注目すべき存在と言えよう。

四 漢文訓読語「愁ふ」とその翻読語

「いよいよ」「悲しぶ」と同様、漢文訓読文に例が多いが、『源氏
物語』にも例の多い語として「愁ふ」が挙げられる。『源氏物語』

の「愁ふ」は「悲しぶ」と同じように名詞形でも例が多く、動詞
「愁ふ」28例、名詞「愁へ」23例が見える。「愁ふ」は築島の分類で
C「源氏物語」にも見えるもの」として処理されている。しかし、
「愁ふ」は、漢文訓読文では極めて多くの例が見られる（『訓点語彙
集成』で「ウレフ」175例「ウレへ」45例）のに対して、『源氏物語』
以外の平安和文では概して例が少ない。すなわち『宇津保物語』6
例、『夜の寝覚』『今鏡』に各3例、『狭衣物語』『水鏡』『増鏡』に
2例、『枕草子』『大鏡』『栄華物語』『浜松中納言物語』に各1例が
見える程度で、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』
『落窪物語』『堤中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『紫式部日記』
『更級日記』には例が見られない。物語の叙述であれば喜怒哀楽の
表現は多用されるはずであるが、このような偏りには意味があるの
ではないか。漢文訓読の影響が指摘される『宇津保物語』にもある
が、「いよいよ」と同じく『源氏物語』以後の作品で徐々に例が増
加することが窺える。

『源氏物語』の「愁ふ」は漢文訓読語の性格を持つと思われるが、
この語は「愁へ顔」「愁へ泣く」「愁へ歎く」などの複合語で多く用
いており、その中に翻読語と考えられる例がある。

○日のわづかにさし出でたるに、愁へ顔なる庭の露さらさらとして、
空はいとすぐく霧りわたれるに
(野分)

○鹿はただ籬のもとにたたずみつつ、山田の引板にも驚かず、色濃き稲どもの中にまじりてうちなくも愁へ顔なり。(夕霧)

野分巻の例は、夜来の風雨で乱れた庭の露のきらめきに涙を流すかのごとき「愁へ顔」を見出し、紫の上を思慕する夕霧の心情と重ねる。夕霧巻の例は、妻を恋ふ鹿の「愁へ顔」を通して、落葉宮を恋う夕霧の心情を投影している。「愁へ顔」のような「用言連用形＋顔」は、62種137例が見られ、人間の内面を自然描写を通して象徴的に描く『源氏物語』の特徴的な擬人法とされている(山口二〇一八)。「愁へ顔」は、『白氏文集』に例が見える漢語「愁顔」「憂顔」をヒントにした式部の応用的表現であろうことに神谷(二〇〇七)にも指摘があるが、語形のみならず表現内容の面でも次のような例に関連が指摘できる。

○且持_レ二盃酒_一、聊以開_レ愁顔。

(『白氏文集』卷九「贈別楊穎士・盧克柔・殷堯藩」)
○戲及_レ此者、亦欲_三千里外_一、一破_レ愁顔。

(『白氏文集』卷五十二「和二微子一詩二十二首 并序」)
『白氏文集』の例は、いずれも親しい人との行き別れとなった白楽天の「愁い顔」を描いている。「源氏物語」と『白氏文集』では、ともに人を恋う心情という点に共通性が見出せよう。

複合動詞「愁へ歎く」は、『源氏物語』の他、『宇津保物語』「水

鏡」にも見られる。これは、『白氏文集』『文選』『後漢書』等に見える漢語「憂歎」、もしくは『楚辭』『陶淵明集』『元氏長慶集』等に見える「愁歎」による翻読語であろう。

○この選びに入らぬをば恥に愁へ嘆きたるすき者どもありけり。(若菜下)

○受_レ命以来夙夜憂歎 (『文選』卷三十七 諸葛孔明「出師表」)

○苦詞無_二一字_一、憂歎無_二一声_一。

(『白氏文集』卷六十一「序洛詩」)
若菜下の例は、源氏の住吉詣の際、神楽の舞人に選ばれなかった者の嘆きを表す。『文選』の例は、孔明が大命を受けた気持ちである。『白氏文集』の例は「洛陽の詩の序文」であり、多くの詩人たちは不遇を詩に詠んだが、自らの詩は境遇に苦しみや愁い歎く言葉は一声もなく、閑居の中で詩を詠む喜びを述べたものである。不運を歎く舞人たちと自身の境遇に不満を抱かずに人生を送る白楽天との心情には落差があるが、同じ「すき者」(風流人)としての境遇をめぐる感情表現という面で共通点も見出せる。^③

「愁へ泣く」に対応する「愁泣」は『後漢書』に例が見える。

○姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、あるは上を恋ひたてまつりて愁へ泣きたまふを、心苦しと思す。(夕霧)

○皆日夜愁泣、思欲_二東帰_一。(『後漢書』卷四十一 劉盆子伝)

『源氏物語』の翻読語の元になる漢語は、前節の「悲しぶ」でもいくつか例を示したように、『白氏文集』のみならず中国正史類の漢語の影響も想定できるであろう（藤井二〇一九参照）。

五 高頻度の翻読語「推し量る」

最後に高頻度の翻読語として「推し量る」を取り上げておく。

「推し量る」は、「推、度也」（管子注）「測、意度也」（礼記注）などの訓語を背景に「推測」「推量」等から生じたと思われる。「オシハカル」は、「推」の訓読語として観智院本『類聚名義抄』の他、『訓点語彙集成』で『法華義疏』平安中期点など9例の訓読例がある。「いよいよ」と同様、和文に溶け込みやすい語であったらしく漢文訓読調の作品以外でも広く例が見られる。

宇津保物語1例、蜻蛉日記7例、落窪物語6例、枕草子10例、源氏物語94例、狭衣物語14例、夜の寝覚16例、浜松中納言物語13例、栄華物語57例、紫式部日記3例、更級日記1例、大鏡5例、今鏡3例、水鏡3例、増鏡16例、讃岐典侍日記5例、堤中納言物語2例、今昔物語集（本朝部のみ）13例、金沢文庫本仏教説話集2例、観智院本三宝絵1例、保元物語1例、宇治拾遺物語3例、発心集4例、覚一本平家物語19例、延慶本平家物語40例、建礼門院右京大夫集3例、十訓抄3例、古今著聞集5例、

十六夜日記1例、とはすがたり10例、徒然草3例

（例が見られない作品↓竹取物語、伊勢物語、大和物語、土佐

日記、法華百座聞書抄、平中物語、平治物語）

初期の物語・日記『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』には例が見えないが、『源氏物語』以降の『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』や『栄華物語』などに比較的例が多い。「いよいよ」と同じように、『源氏物語』の影響によって物語類の文体に溶け込んだ語の一つであろう。一方、漢文訓読的な語として、中世以降の和漢混淆文にも受け継がれたことが窺える。

『源氏物語』では、客観的状況を推測する次のような例がある。

○かくて、院も離れおはしますほど、人目すくなくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。

（若菜下）

○今宵は例の御遊びにやあらむと推しはかりて、兵部卿宮渡りたまへり。

（鈴虫）

『源氏物語』で注意されるのは、登場人物や語り手の立場から、人物の心理やそれに伴う行動を推測する例が多いことである。

○はかなき木草、空のけしきにつけてもとりなしなどして、心ばせ推しはかるるをりをりあらむこそあはれなるべけれ、

中司の君↓姫君の心柄（末摘花）

○とまりましたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地ども、ただ推しはかるべし。
語り手↓源氏の心理(若菜下)

○忘れたまはぬにこそはとあはれと思ふにも、いとど母君の御心の中推しはかるれど、なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは、
浮舟↓母君の心中(手習)

登場人物の心理を付度する場面の多い『源氏物語』において、「推し量る」は鍵語の一つであると言えよう。

人物の心理を推し量る例は、転成名詞でも「推し量り」3例「推し量り事」1例が見える(平安和文での「推し量り」は、他に『紫式部日記』に1例、「推し量り事」は『枕草子』に1例のみ)。

○この「音無の滝」こそうたていとほしく、南の上の御推しはかり事|にかなひて、軽々しかるべき御名なれ。
(行幸)

○あやしき御推しはかりになむ。
(朝顔)

行幸の例は、「音無の滝(光源氏の玉鬘への恋心を暗示)」は「南の上(紫の上)」の「付度」通りの名であるとの意味である。朝顔の例は源氏の言葉で、女五の宮の「さりとも劣りたまへらむとこそ推しはかりはべれ」という発言を受けて名詞化したものである。既述の「かなしぶ」「うれふ」が「かなしび」12例「うれへ」23例など転成名詞の例が多いことにも照らすと、漢語・漢文に関わる用語は概念化され、名詞で使われやすい傾向が窺える。

紫式部が心を推し量ることを概念化して捉え多用した背景に、『白氏文集』新楽府の漢語「推心」の影響があるかもしれない。

○功成理定何神速、速在推心置人腹。

(『白氏文集』卷三・新楽府「七德舞」)

右は、太宗の功業が速かったのは、自らの赤心を推察し他人の心に置き換えたからとの意味である。『源氏物語』に登場する人物は、他者の心を付度し葛藤しながら行動する。他者の心を推し量る行為は、物語を展開させる重要な契機の一つなのである。

六 まとめ

本稿では、『源氏物語』が漢文訓読語を意識的に取り入れて表現を多様に行っていること、また、漢文訓読語が漢語知識によって作り出す翻読語(複合動詞・複合名詞)の形によって導入される場合が多いことなどを指摘した。紫式部は、『白氏文集』や正史類の漢文の知識を元に、漢文訓読語や翻読語を駆使することで語彙・表現を豊かにし、作品を彩っているというのである。

本稿で見たような和文に導入されやすい漢文訓読語・翻読語は、後の和漢混淆文でも多く見られる要素であり、和漢混淆文の「漢」の要素の中核となっていく語であることに注目しておきたい。

注

- ① 『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。作品ごとの用例数については『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）を参照した他、索引類で確認した。使用した索引類は次のものである（編者名は省く）。『伊勢物語総索引』（明治書院）『大和物語語彙索引』（笠間書院）『平中物語 本文と索引』（洛文社）、『宇津保物語 本文と索引』（笠間書院）、『枕草子 本文及び総索引』（和泉書院）、『夜の寝覚総索引』（明治書院）、『狭衣物語語彙索引』（笠間書院）、『浜松中納言物語総索引』（武蔵野書院）、『落窪物語総索引』（明治書院）、『堤中納言物語 校本及び総索引』（風間書房）、『采花物語本文と索引』（武蔵野書院）、『今鏡本文及び総索引』（笠間書院）、『水鏡本文及び総索引』（笠間書院）、『増鏡総索引』（明治書院）、『保元物語総索引』（武蔵野書院）、『平治物語総索引』（武蔵野書院）、『延慶本平家物語 索引編』（勉誠社）、『三宝絵詞自立語索引』（笠間書院）、『今昔物語集索引』（岩波書店）、『打聞集の研究と総索引』（清文堂）、『法華百座聞抄総索引』（武蔵野書院）、『金沢文庫本仏教説話集の研究』（汲古書院）、『宇治拾遺物語総索引』（清文堂出版）、『発心集本文・自立語索引』（清文堂出版）、『撰集抄自立語索引』（笠間書院）、『十訓抄本文と索引』（笠間書院）、『古今著聞集総索引』（笠間書院）、『慶長十年古活字本沙石集索引編』（勉誠社）。八代集は『中納言』と『八代集総索引』（大学堂書店）による。その他、『源氏物語辞典』（角川学芸出版）を参照した。漢籍類は文淵閣本『四庫全書』（漢字情報システム）を用い検索した。
- ② なお「愁へ＋名詞」の複合語には『増鏡』の「愁へ心」もある。元になる漢語として想定される「愁心」は、『白氏文集』にも3例が見られる。その他「憂心」も『後漢書』『毛詩』に見える。
- ③ その他、「愁ふ」を含む同義的結合の例として、「愁へ迷ふ」が『浜松

中納言物語』に「愁へ思ふ」が『夜の寝覚』見られた。「愁へ思ふ」に構成が対応する「憂思」は「至於爵禄患難之際、寤寐憂思之間、誓心同帰、交感非」(『白氏文集』卷六十一「祭微子文」)のような例が見える。

参考文献

- 大坪併治(二〇一七)『石山寺本大智度論古点の国語学的研究 下』(風間書房)
- 神谷かをる(二〇〇八)「一種」「顔」という表現をめぐる——源氏物語の造語法からみて——(『源氏物語の展望』四 三弥井書店)
- 小林芳規(一九六七)『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会)
- 竹内美智子(一九八六)『平安時代和文の研究』(明治書院)
- 築島裕(一九六三)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会)
- 藤井俊博(二〇一九)『源氏物語』の翻読語と文体——連文による複合動詞を通して——(『同志社国文学』第91号)
- 船城俊太郎『院政時代文章様式史論考』(勉誠出版)
- 山口仲美(二〇一八)『言葉から迫る平安文学Ⅰ 源氏物語』(風間書房)